

【館蔵資料紹介】

りよくゆうユシビン 緑釉嘉瓶（19世紀）

當銘 由嗣

本品は、当館が所蔵する壺屋焼の緑釉嘉瓶（19世紀）である。サイズは、高さが 35.0 c m、口径が 7.9 c m、底径が 14.0 c m、最大胴径は 16.5 c mとなる。施された緑釉の色合いが部分によって微妙に変化する美しい一品で、現在残る近代以前に製作された嘉瓶の中でも優品の一つである。

嘉瓶は、沖縄（琉球）で使用されていた酒器である。沖縄方言で「ユシ」は、「めでたい」の意である。首が太く、胴を中ほどで締める独特の形をした瓶をいう。瓢箪形が展開した形か。壺屋焼の中でも、形のバランスをとることが難しい器種のひとつである。結婚などの祝い事がある際に、お祝儀用に酒（泡盛）を入れて用いられたという。贈られた酒は別の容器に移されて、嘉瓶は所有者に戻る。このためか、肩の部分に家紋が入れられたものがある。それだけに優れた作も多く、最後の琉球切手の図案にもなった。大きいものでは、高さ 50 c m前後のものがある。

嘉瓶は、渡名喜瓶と呼ばれる祭器から発達したとされる。また、その淵源に関しては、「伊万里の茶筌型徳利までさかのぼることが可能である」との見解がある^{註1}。渡名喜瓶（トナチビン）とは、仏壇や墓前にそなえられた酒瓶である。その器形は、肩が突き出し、胴は筒形で腰部がはりだした独特の形をしている。渡名喜島からの注文品であったことから、この名がついたと言われる。茶筌形瓶^{註2}は、抹茶を点てる道具となる茶筌の形に似た瓶である。短めの首で肩が張り、緩やかに下方が膨らむ。1650 - 60 年代頃の伊万里焼に多くみられる。特に、輸出色絵の瓶に典型的な茶筌形があるとのことである。

《註》

- 1 倉成多郎「作品解説94 緑釉嘉瓶」『島根県立古代出雲歴史博物館特別展 東アジア交流の盛華 琉球王国』2015 年 118 頁
- 2 鈴田由紀夫「茶筌形瓶」矢部良明（編集代表）『角川 日本陶磁大辞典』角川書店 2002 年

《参考文献》

- 1 大城精徳（編）『琉球の文化』創刊号 1972 年
- 2 普天間敏「渡名喜瓶 となきびん」沖縄タイムス社『沖縄大百科事典』中巻 1983 年
- 3 曾根信一「ユシビン〔嘉瓶〕」沖縄タイムス社『沖縄大百科事典』下巻 1983 年
- 4 柳宗悦（編）・平良邦夫（解題）『琉球の陶器 復刻版』榕樹社 1995 年
- 5 NTT 沖縄支店（編著）『沖縄の陶器（復刻版）』1998 年
- 6 佐賀県立九州陶磁文化館（編）『平成 10 年度企画展 沖縄のやきもの ― 南海からの香り』1998 年
- 7 小島摩文「嘉瓶」矢部良明（編集代表）『角川 日本陶磁大辞典』角川書店 2002 年
- 8 小島摩文「渡名喜瓶」矢部良明（編集代表）『角川 日本陶磁大辞典』角川書店 2002 年

とうめ・よしつぐ（那覇市立壺屋焼博物館 専門員主査）

綠釉嘉瓶

